【解説】

お茶の産地に中国の湖洲がある。その洲に顧渚山というのがあって、別名は「茶山」と云う。この地は宮廷に貢茶（献上）する最高品の「紫筍茶」の産地であり、湖洲の刺史（監察長官）は、毎年二月に現地に赴き、皇帝に献上する茶の採取、製造を監督するのが郡の長官としての役目であった。

晴明節とは中国の墓参の祭りであるが、日本流に言えば生命節とでも言う、一年の穢れを洗い流し、命の洗濯をし、春の息吹を愛でる祭日である。人々は酒食を携えて郊外にピクニックに行く。これを「踏青」（青草を踏む例え）と云う。

晴明節は旧暦二月十日である（新暦三月十五日）が、晴明節の前に摘んだ茶葉を「明前茶」と云い、晴明節から「穀雨」（三月末）までに摘んだ茶葉を「雨前茶」という。緑茶は晴明節に近い日に摘んだものが最良と云われている。

刺史に任じられていた杜牧が、来訪した帝都の役人などの賓客を接待して、晴明節の頃に踏青をした時に詠んだ詩が本稿の五言律詩である。２０字または倍の４０字の漢字で書き、五文字の漢字列の四句（起承転結）で書く。筆者は漢詩歴二ヶ月の「ド」が付く素人であるが、字面を見ると何やら音韻を踏むのが分かる。内容も対句を多用しているように見える。さて、詩の内容は、現代語訳の稿を読んで頂きたいが、起句では晴明節という時季を出して、茶摘みの遊覧船（画船）行事という設定で始まる。長官が催す接待であるから、当然の如く音曲のバンド付である。

承句では更に詳しく雰囲気を記している。「山」は諸兄が好きな、顔立ち、「渓」は女性の胸元の谷間であろう。そうでなければ座興の歌にはなるまい。こういう解釈はやはり、筆者のような漢詩のド素人だから出来るのである。即ち、船には官妓を乗せていて、対句の白雲と紅粉とで「白い肌」「紅の唇」を隠喩している。

転句は「お気に召しましたか？」という賓客へのフォローである。賓客の傍に侍る官妓は、幼さの残る女性であったのだろう。開かぬ半陰とは言うまでもなかろう。

結句は、前句の艶話しを切る、都々逸のような転句の落としどころである。茶仙とは杜牧の造語である。糖尿病になってしまった自身は、酒は控えねばならないが、お茶ケは大丈夫と言って接待の席に就いているのだ。こよなく酒を愛する人を酒仙と云うのを受けて、茶仙と戯けて言っているわけである。

令和六年一月二十一日

大中臣正比呂　記